『蘇悉地対受記』について

水上文義

一

『蘇悉地対受記』は胎金両部のそれと共に、天台密教三部の大法の師説を五大院安然が整理筆録したものとされる、いわゆる三部『対受記』の一であるが、胎金『対受記』に比して最も安然撰述が疑わしいとされる書でもある。

胎金『対受記』に比べて本書の特色は、まず伝法の諸師名が「海説」「角説」「雲記」等と略称されて判然とせず、内容的にも記述が錯雑して諸師口決の羅列というべく、文献の引用や安然の私見が極度に少ない。分量的にも胎金『対受記』に比して少量である。また本書の「雲記」は、円仁の口説集と伝えられる『妙成就記』の「黒字」部分に等しく、本書「朱云」は『妙成就記』の「師説日」という「朱書」部分に等しいといわれている。

本書に引かれる諸師を特定するのが難しいことは従来より問題であったようで、『阿娑縛抄』密宗書籍には次のような説が載る。それは、「海説」を道海、「角説」を円仁または玄静、「座主説」を安慧、「雲記」を承雲と遍昭の共著または円仁あるいは道海、「朱云」は安慧または円珍、としている。これに対して『仏書解説大辞典』で田島徳音氏は、「角説」を円仁とすれば宝楼閣印に「角説、宝楼閣印……是慈覚説也」とあるので円仁が慈覚と自称するはずがなく、また玄静だとすれば安然は弟子の説を師説として引いたこととなるので矛盾する、として、独自の試案を示す一方で本書は安然に仮託された偽書であろうとの立場に立つ。田島徳音氏のこの見解は、以後の本書を扱う場合の中心的な指針[1]となっているといえよう。

二

本書の構成は、いわゆる二巻本の『蘇悉地羯羅供養法』に準拠していると考えられ、引用の諸師説は多岐に渡るが、おむね「海説」「角説」「座主説」「雲記」「朱云」「性記」の順

に配されており、「海説」が大日院道海の説であるとすれば本書は道海を最初に挙げて各印に対する基準のように扱っている点では胎金『対受記』の姿勢と符合する。

次に、本書における安然自身の私見に類すると目される記述は五ヶ所程確認しうるが、それについて検討しておきたい。

まず「掃地印」に「角説、師口私疑壇辺地歟」とあり、ここで「壇辺地」とは角説の前に示される海説に「壇上」といっているのに対してのものと考えられるが、もしこの「私疑」を安然の疑問とすると、この項には角説が引かれないのも同然となってしまい、ここの「私」は角自身と考えることもできる。

「三部結髪印」には「角説云、右手作レ拳安二頂上一、用結法同レ前、或云、仏部以レ印安二頂上一、蓮華安二右肩一、金剛部安二左肩一、私疑、又云、三部結髪印如レ文、但以レ印安レ頂即仏部也、安二頂右一即蓮華也、安二頂左一即金部也」とあり、『日蔵』には「私疑」以下は細注となるが、この疑問は角説と雲記に印の位置を蓮華部は右肩、金剛部は左肩とする説が引かれるのに対して右頂左頂を正とする立場をとってのものと考えられる。それはまた円仁の私記と伝えられる『蘇悉地妙心大』に「或云、三部結髪印如レ文、但以レ印先置二頂上一是仏部、次置二右頂一是蓮華部也、後置二左頂一是金剛部也」とあるのと共通する印相をとっており、記述も類似している。

「入室真言印」では「角説云、本説無レ印。座主説、用二金剛合掌一。五大院私疑レ無二蓮印一」とあるが、この項は海説が「師云」として仏部と金剛部の印を示しながら蓮華部を示さず、角説と雲記が「無印」とし座主説は金剛合掌とあって、本書に引く師説に見る限り蓮華部印は検証しえない。しかし『妙心大』は「次入室真言印、或云……右手置二左手上一是蓮華入定印也」とて仏部と金剛部の次に蓮華部印が記されており、今の疑問はこれをふまえたものと解することができる。この疑問も『日蔵』は細注とするが、ここで問題なのは「五大院」という表現であり、安然自身が五大院と私称したとすればこれは彼の確かな文献に照らして例のないことといわねばならない。従って「五大院」が後世の写誤や加筆でないとすると重大な問題をはらむことになる。

「辟除諸障印」では「角説云、印相用法如レ前、安然問、何故辟除三耶、答云、可二三部印一遣除亦爾」とあって問答体であるが『日蔵』にはこの問答も細注となっている。ただ、この部分をそのままに受け取れば安然の問に対して角が答えたこととなり、「角」は安然に直接に大法を教授しえた人物の一人となる。

最後に「召請印」には「海説云……召請明末文云、此中安来句者、若奉請時加句云、唵翳醯叫翳醯叫、若請二仏部一時、

可レ云二唵翳醯叫翳醯叫怛也[ママ]哦妬一、……大略以レ此可レ検二教法一、今私検二梵語例一、可レ言二怛他哦多翳醯叫、或怛他哦多孽[瑳孽]瑳等一、余准知レ之、已上三部心奉請時、又真言中安来請可レ奉二請之一」とて海説に続いて『妙心大』の「召請明末文」が引かれて召請真言の梵語の語順が疑問とされている。これは「召請明末文」や「角説」「雲記」等にはエイゲイキの次に仏蓮金三部の真言が置かれるようになっているのに対し、三部真言の次にエイゲイキを加えるのを正とする立場である。「梵語例」とは『無量寿如来観行供養儀軌』や『十八契印』等には安然のいう語順で真言が示され、また『妙心大』の「三部心奉請印」に「唵爾那爾迦翳係叫」とあることなどによるのであろう。

以上が本書における安然の私見と目される部分であるが、それらは「角説」またはそれに関連する項に見られ、「辟除諸障印」では「角」との問答体となっている。さらにこれらの疑問は『蘇悉地妙心大』を参考にしている傾向が看取され、また梵語の語順を指摘する等、いかにも安然自身のものと考えられる内容である。しかし一方では「五大院」の私称や、安然の私見と目される記述が浄治路印よりも前の、いわゆる上巻に相当する部分に集中するなど、なお安然撰とするのをためらうべき要素も見出せる。

三

本書には、さらに検討を加えるべき点が多いが、まず諸師の諸説相互に類似点が見出せることもいくつかあり、例えば去垢印、被甲印、清浄印、自灌頂印等における角説と雲記の類似、また金剛輪印、加持供物印、又辟除印等における角説・雲記双方の「又説」の類似などをはじめ所々に散見しうる。こうしたことは、胎金『対受記』が既して「〇和上同二△大徳一」などと同系の説を整理し、まとめた表現をとるのと対比して、本書が多分に未整理のまま残されていたのではないかという推測を可能にする。そして、それはそのままに諸師の相伝の軌跡を物語るとはいえまいか。

次に本書「雲記」「朱云」と『妙成就記』との関係は明瞭にしえなかったが、除萎華印における本書の混乱的記述[2]は例外的存在であって、むしろ『妙成就記』の印の次第が混乱していたり、朱書と称される「師説日」が欠落または欠字を生じている場合が多いなど、本書よりもむしろ『妙成就記』の方に混乱を見出しうる場合が多いといえる。

さらに、本書の「座主説」と「朱云」の間の関係であるが、軍荼利印に「今座主云、臨二於左脚一者、於二別本一置二右字一也」とあるのが初見で以後「座主説」とされるので座主と今座主は同一人物である可能性が高い。またここでいう

「別本」[3]については同印「朱云」で「師日、文云屈二左脚膝一、今案二別本一置二右字一、左字是誤歟」とあって、他の諸師の引かない「別本」によって二巻本『供養法』の「屈左脚膝」を疑う点が「朱云」と「座主説」に共通している。そして、辟除印、攪水印、以土塗身印、軍荼利誦水印、自灌頂印、解結印、著衣印、被甲印、三部結髪印、宝師子座印、金剛迦利印、金剛峯印、および清浄印の一部、などで朱云と座主説は一致しており、逆に全く異るものは軍荼利根本随意浴印、三部母印、華部母印、のみであり、持誦分土印が判然としないが、他はどちらか一方のみが記されているので同異の比較の上では、座主説と朱云は近い関係にあるといえよう。

浄治路印には「師云、故座主云、大師説……大師甚秘レ之不レ伝也、未レ諮二今座主一」とあってここに本書の人的関係を探るひとつの鍵があると考える。ここで大師が円仁というのは首肯しうるとして、そうすれば故座主には安慧を当てるのが妥当となる。そうすれば今座主すなわち座主には円珍が想定できよう。こうしてみれば、本書は相伝上の人間関係においても安然周囲の事情[4]と符合することになる。

四

本書の検討はさらに究明すべき点も多く、とくに『妙成就記』や『蘇悉地妙心大』との比較を詳細にしなければならないが、既して本書「雲記」や「朱云」の方が『妙成就記』より混乱が少ないようであり、また本書には『妙心大』も度々参考として引かれている。そして本書の記述の組み立てや構成は、多分に朱整理の印像を受けるものの、胎金『対受記』に比して著しく異るものでもなければ不自然なものでもなく、人的関係も安然周囲の事情と符合していると考えてさしつかえあるまい。また本書の執珠法における海説は『胎蔵大法対受記』の数珠法の道海の説にも見出しえるのであり、さらに検討[5]すべき点は多いが、本書はその原形の著者に安然を想定しても、ことさらに不自然ではなかろう。

（1）例せば鈴木学術財団『日本大蔵経』解題における真鍋俊照博士の解説や木内堯央教授「安然撰・三部『対受記』の検討」印仏研三三ノ二、奈良弘元教授「五大院安然の著作について」精神科学一三など。（2）大正蔵によった場合、除委華印の雲記は途中で切れているが、日蔵本では『妙成就記』と同じになっている。但し、日蔵本の底本は不明である。（3）別本は、内容的には『大正蔵』甲本、すなわち三巻本『供養法』黄檗版浄厳加筆本に相当する。（4）円仁系統の相伝は円珍に伝えられていない場合もあり、『胎蔵大法対受記』数珠法に「時大和上出二自私記一以示二安然一……故和上説中持珠真言後、更用二執持珠印一而作二念誦一、珍和上説中不レ説二持珠真言一」とて、遍昭の相伝と円珍の伝法上とに相違がみえる。また安然は円珍の伝持に若干批判的立場をとったと想像できる面もある。拙稿「安然の胎蔵界大法対受記について」天台学報二三号。（5）小論は、紙数が限られたとはいえ、文献の引証や論述を極めて省略した点を反省する。小論に補正を加えた拙稿「蘇悉地対受記における一、二の問題」―近刊の「叡山学院研究紀要」第九号を参照されたい。（叡山学院講師）